（２）　中　村　中　学　校

学　　校　　長　　山﨑　利彦
校内研究代表者　　酒井　薫

１．研究主題

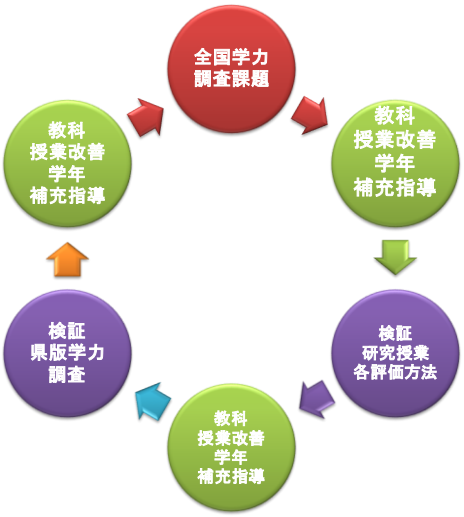
「主体的・対話的で深い学びを実現するための学習過程の工夫」
～見方・考え方を働かせた授業づくりを通して～

２．主題設定の理由

本年度は県の指定「『高知の授業の未来を創る』推進プロジェクトにおける実践研究協働校事業」、「理科授業づくり講座」国立教育政策研究所の協力校、及び「中学校組織力向上のための実践研究事業」の６年目の研究指定を受けている。

本校では全国学力学習状況調査、高知県学力定着状況調査や標準学力調査を検証軸として、授業改善しながら、学力向上に取り組んできた。

しかし、学んだ知識を活用して自分自身で解決する力、未知の状況でも対応できる思考力・判断力・表現力等に課題が見られる。課題の要因として、これまで各教科が異なった視点で授業づくりを行ってきたことにより、各教科で培った力が教科等横断的な資質・能力につながっていないことが考えられる。これらの課題を改善するために、小学校での学びを中学校に繋げるための小中連携に力を入れ、学びの系統性を重視する。また、単元や題材のまとまりを見通しながら、各教科における見方・考え方を働かせる授業づくりを全教科継続して取り組む。そして、生徒が主体的に考えることができる必然性のある「問題」「めあて」や既習事項を生かす新たな課題発見へとつながる「まとめ」「振り返り」の学習過程の研究を積み重ねる。以上のことを共通した授業改善の視点として全教員が全教科で繋げていけば、新学習指導要領において明確化された育成すべき資質・能力が教科横断的に身に付き、「生きる力」の育成につながるという仮説のもと、研究主題を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習過程の工夫～見方・考え方を働かせた授業づくりを通して～」と設定した。



３．研究の進め方と方法

「生徒は一人で全教科を学んでいる」という共通認識のもと、学力向上部会、なかまづくり部会の２つの研究部会と、各教科会及び教科連携を図る教科主任会で研究を進めてきた。研究主題を達成するため、新学習指導要領の実現をめざした授業づくり・授業改善を行うために学校経営計画に基づいて次のような取組を行い、確認・検証を行ってきた。

（１）授業研究の工夫　　（２）授業改善の工夫　　（３）小中連携の推進
（４）学力調査等の分析を活かす取り組み

４．新学習指導要領をめざした授業づくりへ向けての取組

（１）授業研究の工夫

①各教科でＰＤＣＡサイクルを回す

校内授業研究会として、年度当初に数学科が本校の授業づくりについて提案授業を行った。まず、教科会で指導案検討会を繰り返し行った。そして、当日の授業者ではない

他教員が事前授業を行い、それを教科会全員で参観し、再度練り合い、修正し、修正した学習指導案を基に当日の授業者が別のクラスで授業を行い、それも教科会全員で参観する。そして再度学習指導案を修正し、本番の授業を迎えるというＰＤＣＡサイクルを何度も回しながら授業の質の向上に取り組んだ。

校内授業研究会で授業を参観するにあたっては、全教員が自分の教科に落として授業参観ができるように、授業前に教科長から本単元や本時の目標、働かせたい見方・考え方がどのように働かされれば資質・能力に結び付くと考えているのか、などについて説明されている。

②研究授業について

研究授業では主に、以下の二つの論点に沿って生徒のつぶやきを拾いながら授業を参観する。

（Ⅰ）目標について→目標と照らして授業を参観する

・問題状況をいかにつくるか

・目標がどのように達成されたか、達成されなかったか、わからない

例えば・・・

「生徒Ａは○○することによって、□□が分った」

「生徒Ｂは◇◇で止まって、◆◆と直して・・・・・・していた」など

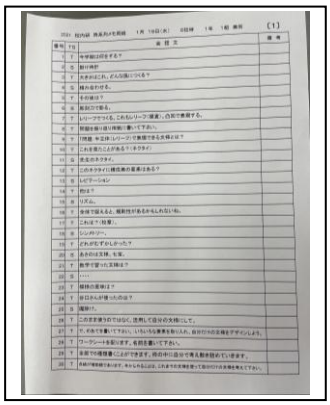
※子どもに近づき黙ってつぶやきを拾う。

（Ⅱ）どうすればよかったのか

・生徒の実態と比較して

・手立ては有効であったか

また、教師と生徒のやり取りを※<u>ＴＳシート</u>に記録し、その後の協議に使うことで、どのようなやり取りが効果的であったか、なかったかについても根拠を基に明確にすることができた。

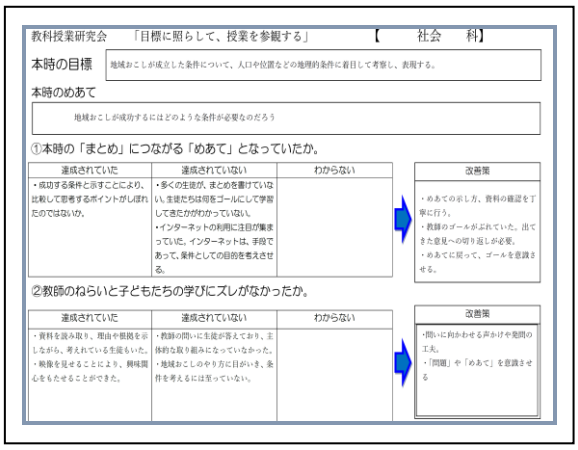


そのような授業研究会を行うことで、授業の見方を養い、全教員の授業力アップにもつなげていけるのではないかと考えて取り組んでいる。※ＴＳシートとは教師と生徒のやり取りを記録したシート

（２）授業改善の工夫

本校では、各教科の授業を参観する際には、教師による授業改善に向けてのアンケートで５つの項目について見取っている。その中で、「教師のねらいと子どもたちの学びにズレがなかったか」のアンケート項目の数値が最も低く、課題として見えてきた。

そこで、課題として見えてきたこの項目について授業改善を意識して行うために、教科会で授業を見合う週間をつくった。あらかじめ教科会で「付けたい力はどのような力なのか」ということを基に「まとめ」を明確にし、その「まとめ」につながる「問題」と「めあて」をどのように生徒から引き出すのかについて検討し、働かせたい見方・考え方は何なのか、またどの場面で働かせると資質・能力に繋がっていくのか、などについて、協議を重ねたうえで授業づくりを行った。



教科授業研究会　「目標に照らして、授業を参観する」　【　社会　科】

本時の目標　地域おこしが成立した条件について、人口や位置などの地理的条件に着目して考察し、表現する。

本時のめあて　地域おこしが成功するにはどのような条件が必要なのだろう

①本時の「まとめ」につながる「めあて」となっていたか。

達成されていた	達成されていない	わからない	改善策
・成功する条件と示すことにより、比較して思考するポイントがしぼれたのではないか。	・多くの生徒が、まとめを書けていない。生徒たちは何をゴールにして学習してきたかがわかっていない。 ・インターネットの利用に注目が集まっていた。インターネットは、手段であって、条件としての目的を考えさせる。		・めあての示し方、資料の確認を丁寧に行う。 ・教師のゴールがぶれていた。出てきた意見への切り返しが必要。 ・めあてに戻って、ゴールを意識させる。

②教師のねらいと子どもたちの学びにズレがなかったか。

達成されていた	達成されていない	わからない	改善策
・資料を読み取り、理由や根拠を示しながら、考えれている生徒もいた。 ・映像を見せることにより、興味関心をもたせることができた。	・教師の問いに生徒が答えており、主体的な取り組みになっていなかった。 ・地域おこしのやり方に目がいき、条件を考えるには至っていない。		・問いに向かわせる声かけや発問の工夫。 ・「問題」や「めあて」を意識させる

そのように教科会で練った授業を代表者が行い、教科部会で見合い、さらに校内研修で授業参観シートを基に全体で検証し課題を焦点化していく、という流れで課題改善を図った。

（３）小中連携の推進

①実践研究協働校事業

まず今年度は、国語科、数学科共通する取組として、９年間の学びの系統性をしっかりと踏まえ、「資質・能力を系統的に高めていくためにはどうすればよいか」についてを柱に、何度も繰り返し学習指導案の検討会を実施した。小学校の授業づくりについては、中学校の教員も学習指導案検討会に参加し、中学校の授業づくりについては小学校の教員も参加し、お互いの授業づくりについて、９年間の学びの系統性を踏まえ、資質・能力の育成に向けた授業づくりに取り組んだ。

②小中合同校内研究会

冬期休業中に中村小学校と合同で校内研修会を行い、「各教科で付けたい資質・能力の確認」「ノートの活用の仕方について」「来年度に向けた取組の方向性の確認」等を行い、児童・生徒の学びの質の向上に向けた取組について意見交流を行うことができた。

（４）学力調査等の分析を活かす取組

①４月、教科部会で自校採点と分析

②全教職員で分析結果と課題を共有し、全体として付けなければならない力の確認

③各教科で具体的な取組を考えて実践

④検証は研究授業、評価問題、単元テスト等で検証

業者採点後も①～④のサイクルで分析を行った。また、県版学力調査後も同様のサイクルで分析を行う。

５．今年度の成果と課題

成果

〇教科会の充実

・週１回の定期的な教科会だけでなく、必要に応じて時間を見つけて教科会を実施している。

・授業計画や学習指導案の作成、問題やめあて、まとめ等の質の向上に取り組むことができている。

〇他教科とのつながり

・教科主任会で他教科の取組を報告・確認し合い、教科部会におろし担当教科に活かしている。

・カリキュラムマップを活用して教科等横断的に授業を繋げることによって、生徒の資質・能力の向上を図る取組の推進ができた。

〇学力向上に向けてのサイクル化

・各種学力調査を検証軸としてその都度課題を明確にし、取り組むべき方向性を検討・実施することができた。

課題

・研究主題達成へ向けて、学習指導要領の内容を具現化し、さらに授業の質の向上を図ること。

・教師のねらいと生徒の学びにズレが生じないよう、「問題」「めあて」「まとめ」「振り返り」の研究を教科会で深めていくこと。

・各種学力調査での学力の数値目標を達成すること。

・学力の定着が厳しい生徒への手立てを考えること。